


 書評

一条貞雄 著

精神科医が見たレオナルド・ダ・ヴィンチ

越野好文

レオナルド・ダ・ヴィンチは謎に包まれている—ダ・ヴィンチその人も、そしてその作品も。「最後の晩餐」は謎に満ちており、「モナリザ」もしかり。そしてダ・ヴィンチ出生の謎、鏡文字の謎。それらには、ダ・ヴィンチ自らが仕掛けた謎もあれば、歴史のベールに覆われ、謎となったものもある。

それらの謎に立ち向かったひとりの精神科医にして名探偵が、元仙台大学大学院教授の一条先生である。本書は先生のダ・ヴィンチの謎解明プロジェクトの記録である。わずか 163 ページのコンパクトな本であるが、その背後には丹念に集められた膨大な文献・資料、現場へ出かけて行つての綿密な作品の観察、そして深い思索・推理が隠れている。絶版になった資料の原本を入手するためにアメリカの古書店にまで注文したとのことである。そしてできあがった本は、多くの挿絵を活用し、西洋美術に造詣の深い人にも、それほどでもない人にもわかりやすい。しかも、説得力を持って良質の探偵小説のようにダ・ヴィンチの真実への道を解き明かしてくれる。

推理小説の書評で、謎解きを述べるのはマナー違反であるが、ほんの少しでも内容を紹介してみよう。

第 1 部は、「最後の晩餐に見る“隠し絵”」である。イタリア・ルネサンス時代に画家は自分の代表作となるような作品に自画像を描き込むことがあった。著者の調べでは、もっとも古い例はマザッチョの「教会の聖ペテロ」であったといい、その他にもボッティチェリの「マギの巡礼」、ラファエロの「アテネの学堂」などの中に自画像を見つけることができたことが豊

富な資料で示されている。そしてダ・ヴィンチのライバルのミケランジェロは、「最後の審判」の中に隠し絵として自画像を描き込んでいるといわれる。そこで、ダ・ヴィンチも代表作の「最後の晩餐」に自画像を描き込んだのではなからうかという謎に著者は挑戦している。

第 2 部はもっともポピュラーな謎、「モナリザのモデルは誰？」である。最近ではコンピュータや X 線撮影による作品の分析などの科学的手法を用いたモデル探しが行われている。医学者である著者は、モナ・リザの鼻根部の左側と左内眼角との間にあるごく小さい疣のような皮疹に注目し、モデルは実在の人物であると確信し、多くのエビデンスと推論から新たな人物を探り当てた。

そして第 3 部の「精神科医が見たレオナルド・ダ・ヴィンチ」ではダ・ヴィンチ出生の謎をはじめとして、同性愛説、容姿と性格、左利き説などダ・ヴィンチその人にかかわる謎を精神医学者の目で解き明かしている。

本書には、精神科医の眼で見たダ・ヴィンチとその作品について、実に魅力的な謎が新しく提出されている。ダ・ヴィンチの真実に迫るための方法の 1 つとして、精神医学という新しい戦略の可能性が示された。

少々時間をみつけて、ダ・ヴィンチの謎にゆったりと挑戦するこころのゆとりを持ちたいものである。

(金沢大学大学院脳情報病態学(神経精神医学)、第 52 回日本病跡学会総会会長)

● 四六判 165 頁 2004 定価 1,890 円 (本体 1,800 円 + 税) 近代文芸社刊